
猫の営業

高宮 かしお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の営業

【Nコード】

N3931Y

【作者名】

高宮 かしお

【あらすじ】

会社の先輩、銀座佑二にアタックされるも、なかなか受け入れられない和子。愛しの飼い猫”銀座”にはこんなに愛を注げられるのに……！今日も二人はやっぱり微妙な距離。

(前書き)

まさか三作目まで行くとは思いませんでしたが、来てしまいました。
読んでいただけるととっても嬉しいです。

私の所属する営業課の先輩、銀座佑二と一夜と翌日のランチを先週末に一緒に過ごした後は、それまでの彼の『オレと付き合つて攻撃はぱたりと止んだ。』

というより、彼とは同じ課でありながら最近会社でほとんど顔を合わせることがなかった。壁にかかっているホワイトボードの彼の欄には”直行”の文字が連なっている。そして終業時間までに帰社しない日々。ま、今はお得意様巡りに加え、新規開拓で忙しいのよね。

今日は仕事帰り、学生時代のR子と食事の約束。

フレンチレストラン、まあ女子雑誌で”キュイジーヌ”と書かれていたりする類いのそれ。ていうか口に出すと恥ずかしい響き。

”きゅいじーぬ”、で、飲んで、食べ、お互い新入社員としての愚痴を言いの、お局のイヤミの口調を真似しーの、残念な部長に同情しーの、もちろん、カツコいい同期や気になる先輩の話にもなる。

「和子は、いないの？ 社内に気になる人」

ちら、と銀座さんの顔が浮かんだが、出て来た言葉は彼の名ではなかった。

「いない。アンチ社内恋愛だもん。なんか、社内で付き合つと、他の人に監視されているようで嫌じゃない？ しかも、仕事しに会社に行つてるの。恋人見つけに行つてるわけじゃないでしょ」

「うわ、かったーい。アイロンマン否アイロンウーマンね。そんなんだからGさんに逃げられるんじゃないの？ あんたと結婚まで考えていたらしいじゃん」

「いや、無理。私ちゃんと仕事して、ある程度会社に自分の居場所を確保してからで無いと巢作りなんてする気ない」

もうちょつと、男に頼れば可愛げがあるのにねえ。

ワインでかなり頬を染めて、それでもR子はボトルを取ると、さらに自分のグラスと私のに注ぎ足した。

その足音に気づいたのは、駅を過ぎ、商店街を抜けて少ししてからだ。平日の、あと少しで日付も変わるう時間帯ともなれば人通りはほとんどない。R子と盛り上がり、平日だというのに時間を忘れてしまった。アパートまではまだ少し距離がある。酔いは醒め、背中を冷たい汗が伝った。こつこつ、と革靴の音が自分の歩くペースとほぼ同じだ。真っ暗な道に外灯こそ明るいが、それはいざというときの助けにはならない。

絶対について来ている。

私は携帯を出すべく、歩きながらショルダーバッグに手を突っ込んだ。電話してたら警戒してたぶん、近寄って来ないはず。それでも後ろから襲われたら、肘鉄食らわせて……それとも蹴りの方がいい……？

そんなことを考えながら、電話帳をスクロールする。誰にしよう。誰に。

『銀座佑二』

名前の上で思わず指が止まる。銀座さん……近所だし、来てくれるかも。たぶん……

それでも一瞬躊躇した。自分が『自分に気のある銀座さん』を利用している気がしたからだ。

体を重ねたとはいえ、実のところ私は、まだ彼に対する自分の気持ちがよくわかっていなかった。

「こんばんにゃ」

いきなり後ろから抱きつかれた。

「きゃああぁ」

反射的に、携帯を持ったまま肘をありったけの力で後ろに突き出していった。

「ぐう……ちよ……和、子………」

「え……っ、ぎ、銀座さん?! 何やってるんですか! こんな時間になんか、『こんばんにや』って!」

自分の名を呼ぶ男の声に振り向けば、丁度外灯に手をつけて体を折り曲げている銀座さんがいた。

「い……いきなり、だ、抱きつく方が悪いんですからね!」

「いてー、まじでいてー。と、片目をつむってにっとなめた。彼はまだお腹をさすりながら、隣を歩き出した。

「だって、自分の彼女が目の前歩いてたら声かけるに決まってるじゃん。あ、見たらわかると思うけどオレ、仕事帰りだから」

「声かけるだけでいいんです、声だけで。それに……私銀座さんの彼女じゃないし」

へえ、と彼は私を見下ろした。

「じゃあ、この間のはなんだったの。なんでついて来たの? なんでオレと寝たの」

「じ、自慢じゃないけど流され易いです。私は。それにあのとき、銀座さんが一番まともなこと言った気がしたから……ちよつと魔が差しただけです。だいたい、今日び、一回寝ただけで彼女、っと思うひとないんじゃないんですか? 銀座さんみたいなルックスの人が、それこそ百人斬りとかしてそうなひとがそんな口マンチツクってちよつと意外だな」

「そうか」

銀座さんはちよつと冷めた横顔を見せた。

どき、と心の片隅で後ろめたさを感じたのはなぜだろう。

「わかった」

「わかった……? ってなにがですか?」

「いいのいいの。あ、もうおまえんちだな。じゃあ、おやすみ。歯磨けよ。ちゃんと化粧落とせよ。遅刻するなよ。まー、オレ明日も

直行だから会うことないけどな」

私のアパートの前で彼はひらひらと手を振り、笑顔で先の角を曲がって行った。

「え……、ちよ、つと。何？ 何がわかったの？」

私は全く彼の言葉が理解出来ないまま、アパートの階段を上った。

アレからやっぱり彼に会うこと無く日曜日。

昼はデパートに出掛け、お弁当箱と、アロマオイルなど調達。新しいマグカップは、赤の水玉と、水色の水玉と一応、対で買った。銀座のご飯茶碗も黄色の水玉にした。

野菜炒めと即席ラーメンで簡単な夕食の後、銀座を膝の上に乗せながらサスペンスドラマを見ていると玄関のチャイムが鳴った。

時計は21時を回っている。

いやだな……

足音を忍ばせてドアスコップを覗く。変な人だったらもちろん、居留守を使う。

廊下に立つのは、銀座さんだった。居留守決定。

二三次、立て続けにチャイムが鳴ったが、私はTVをミュートにして息をひそめる。と、いきなり携帯が鳴り出す。

「和子ー。いるんだろ、開けるよ。携帯鳴ってるの、聞こえるんだけどー」

しぶしぶ、でもチェーンはかけたままドアを開けると、銀座さんの機嫌良さげな顔が覗いた。

「DVD、見ようぜー。借りて来たから」

隙間から彼はDVDをちらつかせる。それは、シアターで見ようと思っただけで見逃した映画！

み、見たい……

足下に暖かい感触。先日、結納品と称してお気に入りの猫缶を差

し入れた銀座さんの声を覚えていたのか、いつのまにか銀座がドアの隙間から外を覗いていた。

「おー、銀座。おまえにもね、いいものあるぞ」

彼はかがんで銀座の頭を撫でた。

「おー、と銀座が鳴くので、仕方なく私はチエーンを外した。猫のようにするりと入って来た彼は、手を洗ってから銀座に、持参の猫缶を開けてやっていた。それも、なかなか見つからない銀座の大好きなメーカーのカツオ味。もしかしていつもこのひとが買い占めているんじゃないかと一瞬疑った。

「居留守使われるとかって、オレ相当可愛そう」

DVDを勝手にセットして、リモコン操作をしている彼はぼつりと言った。

うつ、痛いところを突いて来る。

「本当に和子にとって迷惑なら、帰るよ」

ソファ代わりのベッドに胡座をかいて彼は壁に寄りかかる。脚の間にはすでに銀座が丸くなっていた。猫缶で釣られるとは……安いよ！ 銀座！

「え……そんなことないですよ。それに、銀座、寝ちゃってるし……」

「そうか」

予告編が流れている間、お茶を煎れる。買ったばかりの色違いのお揃いのカップに。サラダせんべいも用意する。トレーごとベッドに運び、少し彼と間隔を空けて座った。

「字幕にする？ 吹き替えにする？」

「字幕がいいです」

銀座はすーん、すーんと鼻息を立てて眠っている。

「良くなかった？」

映画、まだ終わってないですけど？ と、言おうとした矢先の彼の次の言葉。

「オレとのセックス」

なんだ、そのこと。

「いえ……よかったです」

すごく、と付けたした。

「なら、いいんだ」

彼は画面を見たまま、脚の間の銀座をゆるりゆるりと撫でていた。私は映画よりもそのかたちのいい手に目が釘付けだった。

いいなあ……銀座。

この間、その手は私の髪の間で遊んでいたのに。頬を撫でて、くちびるに触れて、ウエストを滑って脚の内側を撫でていたのに。

彼の手の感触を思い出し、一人恥ずかしくなって傍らのクッションをぎゅっと胸に抱いた。

「手、握ってもいい？」

「へっ？」

心のうちを読まれたのかと思い、出た声は裏返っていた。銀座さんは相変わらず画面を見たまま。

「だ、だめです」

「残念」

抑揚の無い声だった。それが却って私を不安にさせた。

何か喋らなきゃ。

「それにしても、銀座さんは手際がいいと言うか、ツボを心得ていると言うか……私が見たかった映画持参だし、銀座にもお土産持ってくるし……」

彼はそのときだけ、ちらと私を流し目で見た。

「オレ、営業よ？ それに業績、そこそこ上げてるんだけどね……」。

営業が落としたい女のリサーチくらい出来なくてどうするよ」

「はあ」

会話が終わってしまった。それでも私の中では、まだ彼を拒絶した気まずさが残っていた。もしかしてあの一言が彼を傷つけたかも、と思ったら、自分の胸が痛んだ。

「……手を握られたら、もっと、触って欲しくなっちゃうと思うから……銀座さんに……もっと、もっと、って、欲張りになると思うから……だから、だめなんです」

言った後で、ものすごく耳が熱くなったから、抱きしめたクツシヨンに顔を埋めた。

銀座さんは何も言わない。

スルーですか、もしかして。こんな言い訳じゃダメだった？ 本当のことなのに。

恐る恐る顔を上げると、彼は何とも言えない表情を顔に浮かべていた。こんな顔、するんだ……おまけに目元も少し色づいている。

「お、オレも、たぶん手だけじゃ、歯止めが利かなくなりそうだし

……」

「ほ、ほらね……だ、だめですよ。まだ彼女じゃないんだから……」
そうはいいつつも、私はぐっと距離を詰めて彼に体を預けた。寄り添って、そのままの姿勢で、結局彼は私に手を出すことも無く映画を見た。

「じゃー、今夜、和子の夢見るから」

靴を履いて玄関に立った彼は、私の頭を軽く撫でた。

「勝手に出さないでください。出演料請求しますよ」

「体で払う」

「却下」

彼はカラリと笑い、そして来た時と同じくらいご機嫌で帰って行った。

だから、あの赤い水玉のカップは銀座さん専用、と教えてあげるのはもう少し後にしようと思った。

あんまり簡単に落ちても、営業課のホープにとっては面白くないでしょうから。

【猫の営業ノ完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3931y/>

猫の営業

2011年11月10日08時11分発行